少人数の複式学級で学び合いを活性化させる学習環境

～異学年交流と学びの場の設定～

中西　大

複式学級における課題として，異学年がどのように交流して学び合うか，また少人数で学びを深めるにはどうすればよいかなどがよく挙げられる。そこで，異学年が異なる学習内容であっても，共通のテーマをもたせたカリキュラムデザインを行うことで，自然な形で交流しながら学び合うと考えた。また，学びを深めるには話し合いの学習活動が欠かせないと考え，話し合いを活性化できる学習環境は，子どもたちの距離感や特別な場所にあると考えた。異学年交流や学びの場を特に設定しない時間と比較し，子どもたちの学びの様子からその効果を検証した。すると，異学年が同じテーマをもつことで交流が盛んになり，特別な場が話し合いを活性化させた。しかし，各学年で特色のある学びに欠け，考えが多様化しないという少人数が抱える根本的な課題を解決する成果は得られなかった。

キーワード：複式学級，異学年交流，少人数，カリキュラムデザイン，コミュニケーションテーブル

１．研究目的

１．１．カリキュラムデザイン

複式学級における異学年交流は，これまでも様々に取り組まれ，異学年同内容や，類似単元の実施時期を揃えるなどされている。しかし，AB 年度方式の課題や年間カリキュラムデザインの難しさから，異学年が交流しながら学び合う姿を見ることは稀である。複式学級の良さでもある異学年が同じ教室で学び合うという点を生かして学びを深めたい。そこで，異なる内容の単元であっても，共通のテーマを設定することで交流を生むだけではなく，互いに関わりながら学びを高め合うことを目的として取り組んだ。

１．２．学習環境

少人数学級の課題の１つとして，多様な意見が出なかったり，思いを伝え合ったりできないなど，他者との交流の少なさがある。教師が出て視点を変えさせたり，異学年交流や架空の他者との考えの違いを見出したりする取り組みがあるが，どれも子どもたちの思考に沿ったものではないと感じる。そこで，子どもたちが学びを深めるには話し合いが欠かせないと考え，話し合いを活性化することで得られるものが多くなると考えた。少人数であっても，多様な意見に触れたり，見出したりできる学習活動を目的として取り組んだ。

２．研究方法

２．１．カリキュラムデザイン

カリキュラムデザインにおいて，共通項があるだけでは異学年交流することに必然性が少なく，子どもたちの学びの筋から外れやすくなると考えた。そこで，異学年交流を行う習慣を子どもたちに身に付けさせ，カリキュラムデザインを丁寧に行うことが欠かせないと考えた。また，単元計画を行う際，共通テーマの設定だけではなく，他教科との関連も意識して幅広く互いに学び合える環境をつくることにした。

２．１．１．異学年交流の習慣

本学級は，１・２年生の複式学級である。４月当初から，２年生が１年生の学校生活を助けることから異学年の関係づくりを始めた。

授業においては，学習に行き詰まった場合にはアドバイスし合ったり，互いの発表を聞き合ったりする機会を多く設けた。（図１）一般的に上学年が下学年にアドバイスし，手本を見せることが多いが，下学年からもアドバイスしたり，一緒に考えたりするように習慣づけた。

図１　学年が交じってアドバイスする様子

また，「ちびっ子参観」を行い，互いの授業を見合う活動を取り入れた。自分たちの学年だけで学ぶのではないという意識をもたせたかったからである。

２．１．２．共通テーマの設定

国語科における音読劇発表，算数科における計算や問題を解くための考え方を共有するなど，異学年交流

に取り組みやすい学習活動がいくつかある。その反面，常にそのような取り組みができるとは限らず，子ども主体になりにくい。そこで，学習活動を共通にするのではなく，テーマを共通に設定することで，それぞれの学習活動が異学年に生かせると考えた。

授業の実際に挙げる生活科においては，「笑顔」を共通テーマに設定した。１年生は家族を笑顔にするための取り組みを行い，改善しながら計画する学習活動である。２年生は，働く人の努力を知りながら，お客さんを笑顔にするための工夫を探る学習活動である。低学年の子どもでもイメージしやすく，２年生はこれまでの経験を生かして１年生にアドバイスできると考えた。また，１年生も２年生と一緒に見学に出かけ，お客さんを笑顔にする工夫を探ることで家族を笑顔にするためのヒントにできると考えた。

２．１．３．他教科との関連

２．１．２．で述べた生活科の単元では，以下のような点でカリキュラムデザインに配慮し，常に１・２年生が共通のテーマで各学年の目標をもって学べるようにした。

・国　語　科…笑顔カード作り・質問用紙作成
　　見学メモ整理
・図画工作科…笑顔を描こう・アイデアを伝えよう
・道　徳　科…公共交通機関利用時のルールやマナー
　　見学やインタビューのマナー
・特別活動…みんなで出かける校外学習

２．２．学習環境

本研究において注目したのは，子どもたちの話しやすさである。すでに，コミュニケーションテーブルと称する６～８人の子どもたちが囲える低いテーブルでの活動には取り組んでいた。しかし，話し合いを活性化することの目的を主として，学習机での話し合いに加えて取り組むこととした。また，物事を考えるためのスキルを例示し，意識させた。

２．２．１．話しやすさ

子どもたちの行動を観察し，話しやすさに関連すると思われる状況を授業にも取り入れた。それは，休憩時間に見られる子どもたちの姿であり，遊びの話し合いをしている瞬間を可能な限り再現することにした。

・友達と話すときの距離感（友達と近い）
・解決したいことがある場合
・伝えたいことや聞きたいことがある場合
・考えに違いがある場合

２．２．２．思考スキル

話し合いを深めるためには，自分の考えを明確にもつ必要がある。遊びの話し合いであっても，自分がしたいことや遊びに対する自分なりの考えがあるから話すのである。そこで，教師は「○○について考えましょう」などと指示しなければならないが，何をどのように考えるかが明確になっていない子どもにとって難しい学習活動となる。この「どのように考えるか」について，思考スキルを言葉と図で示し，学習活動の際に示しながら取り組むことにした。（図２）

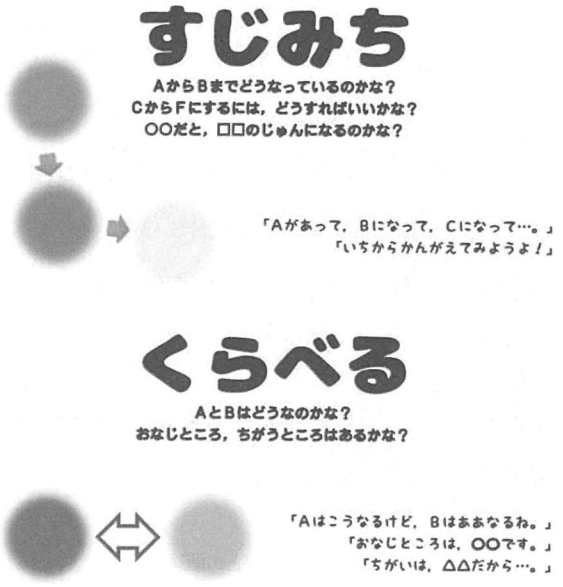

図２　思考スキル例

２．２．３．コミュニケーションテーブル

コミュニケーションテーブルは，子どもたちが話し合う距離感を縮め，また対象に没頭できるように取り組んでいるものである。本研究では，コミュニケーションテーブルでの活動を中心に据えて教師が示して活用するのではなく，子どもたちのコミュニケーションテーブルでの話し合いのしやすさや効果を実感させ，自分たちが必要な場面で活用できるように指導した。（図３）

図３　コミュニケーションテーブル

３．授業の実際

３．１．カリキュラムデザインと授業

スタートカリキュラムに示されるように，１年生では，幼児教育や他教科との関連が重要視されている。また，２年生の生活科では，他教科や３年生以降の理

科や社会科との関連が求められる。そこで，本単元を中心にして実際に行ったカリキュラム面での関連付けを以下に示す。なお，幼児教育の内容については，一般的に行われている活動の例を示している。(図４，５)

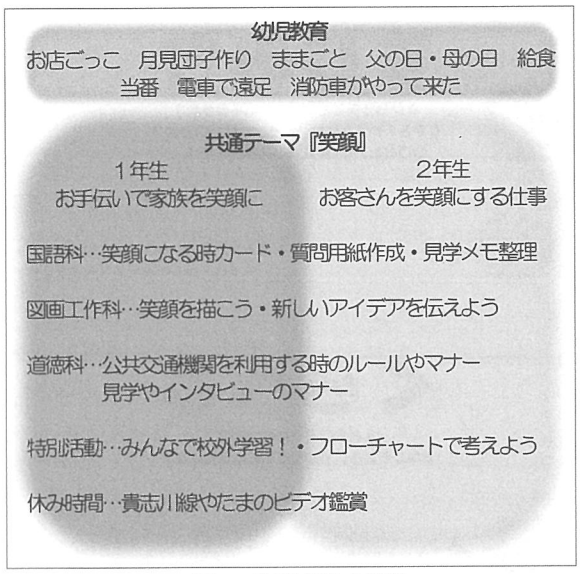

図４　各教科等との関連

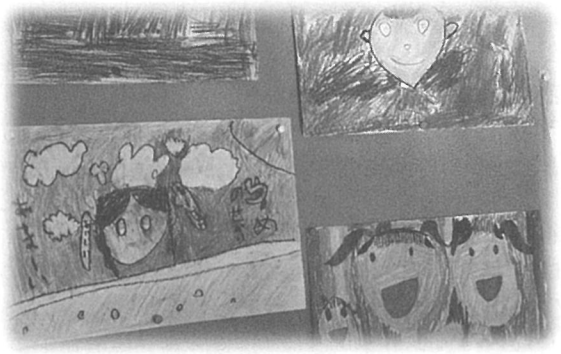

図５　図画工作科で笑顔を描く

共通テーマの設定により，１時間の授業における導入を異学年が同時にできた。(図６) また，２年生から出たアイデアや意見を１年生も取り入れて考えようとした場面の板書を以下に示す。(図７) いずれも，中心の「えがお」と書かれている導入部分を境に，左が１年生，右が２年生の板書である。

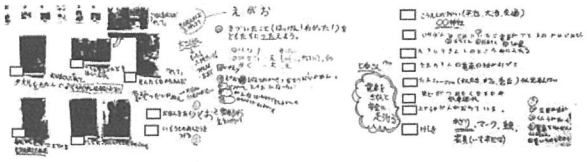

図６　同じ導入から広がる２つの学び

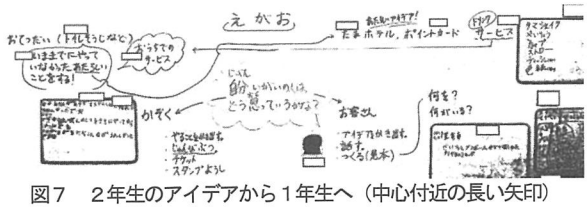

図７　２年生のアイデアから１年生へ（中心付近の長い矢印）

３．２．学習環境と授業

２年生の生活科にて，お客さんを笑顔にするアイデアを出し合う授業を行った際の記録である。これは，話し合いの場をコミュニケーションテーブルに移した場面(太字)の前後約５分間の主な発言の記録である。

ちさ：あさちゃんから。
こう：どっちからする？
とみ：(発表の順が) 反対でもいいから。
こう：後で見せたら？
はる：さえちゃん？
はる：言って，何か。あさちゃん。
とみ：まきちゃん読んで。
こう：さえちゃん読んで。
ちさ：とみくんどうぞ。(とみが写真を見せる)
こう：写真や…。
教師：新しいアイデア出た？
こう：まだ言ってない。
教師：紹介してみようか。鉄道で働く人に「これいいね！」って言ってもらえるアイデアを，どんどん出しましょう。
とみ：えっと…。(図８)
こう：う～んと…。
教師：まきちゃんのアイデア，気になってるんよな。
はる：たまホテルや。
まき：説明，書いてない。
教師：思ったこと，話したら？
まき：…。
教師：コミ亭（コミュニケーションテーブル）に移動！
まき：駅にホテルをつくったらいいと思います。たまホテルは，猫と一緒に泊まれるホテルで，入口に丸のマークとか，ペットのマークがあります…。
さえ：(丸いのは) 目やで。(図９)
とも：それやったら，犬も泊まっていいん？
いま：うん。
さえ：いいなあ。うれしい。
せい：たま電車に，猫を連れて来てもいいようにしたら？
たか：でも，猫が苦手な人もいてるで。
せい：別にしたら？
とみ：それやったら，ほかにもサービスしたらいいんよ。無料の飲み物とか。
こう：どんなお土産あるん？ペン？１０００円？
はる：でもさ，何かたまの…。
つよ：これ，説明して。
あさ：たま電車と…。
はる：何これ？
さえ：ジュース？
はる：ほし～い！
まき：ホテルでも，なんかサービスあったら何回も来てくれるかも。
とみ：それいいな！

図８　学習机での活動（３人の視線が外れている）

図９　コミュニケーションテーブルでの活動

４．授業の考察

４．１．共通テーマがもたらす効果

図７の板書記録を見ると，特に，２年生の発言にあった「お客さんへのサービス」が，１年生の家族へのサービスへとつながった。この瞬間から，１年生は，意識を向けていたお手伝いから，なにかサービスをあげられることはないかと考えるようになった。行動だけではない，手紙やその内容から読み取れる「気持ち」が生み出す笑顔について考えていたからと察する。

１年生は，サービスという今までになかったことに気づき，「新しいことをする」という発言にもつながった。同時にこの発言は，２年生も影響し，全く新しいアイデアでお客さんを笑顔にしようと，積極的にアイデアを出すため，具体物を制作しようとしていた。

これらのことから，断片的な情報であっても，共通テーマがあることで情報を共有しやすくなり，異学年からの刺激によって，これまでにない活動意欲にもつながったと考えている。異学年が効果的に関わりながら学ぶことができたと考える。

しかし，共通テーマがもたらす課題として，各学年の学習目標に応じた学びが成立するかということが挙げられる。図６を見ると，左側の１年生は写真を使って取り組みを説明し，右側の２年生は，発表にとどまらず駅員さんが話していた思いに触れながら，さらに笑顔を増やす方法について考え始めていることがわかる。各学年が，それぞれに違う内容だったからこそ，共通テーマであっても異なる学びが生まれたと考えている。

４．１．学習環境がもたらす効果

授業記録では，主な発言を取り上げているが，実際には自分のアイデアに関連する写真を見せるなどの活動が少しあった。しかし，発表の順を譲り合ったり，相手の意見に触れようとしたりするだけのやりとりに留まっていた。これは，子どもたちが主体的に関われる距離感ではないからだと考えている。発言があってもそれに別の子どもの発言が続きにくく，関わりが生まれないことも，示されている図に直接関われない距離にいるからだと考える。

しかし，コミュニケーションテーブルに場所を移してからは，説明の仕方や話の聞き方が変わった。図８では，手前の発言者と示している図に視線を向けているのは２人である。図９のコミュニケーションテーブルでは，全員が発言者と図を囲んで関わっている。指で図を指している様子からも，近くで目線を揃え，自分も図に触れながら「何これ？」などと相手への質問をするようになっている。

発言の多い授業であっても，深く他者と関わって関連のある発言をつなげていることは少なく，教師はそれらをつなぎ合わせる必要がある。しかし，この距離感と場，対話の雰囲気を変えるという一種の気分転換的な要素は，子どもたちの集中力を高め，教師が交通整理をせずとも，相手の発言から逸れずに話し合いを活性化させられると考えている。

５．成果と課題

成果として次の点が考えられる。

・関連する別の授業を含め，コミュニケーションテーブルのような場での活動では，子どもたちの話し合いが活性化された。
・通常の学習机での活動とコミュニケーションテーブルでの活動を組み合わせることで，子どもたちの関わり方が一気に加速した。
・コミュニケーションテーブルでの活動は，複式学級の特徴である少人数だからこそ実現し，それを生かすことができた。
・単元を通して共通事項があることで，情報を共有しやすく。各学年の学びと授業時間に無駄がなくなった。
・カリキュラムデザインを丁寧に行うことで，目標を１つに据えて各教科の学びが展開でき，子どもたちの意欲も向上した。

課題として，次の点が考えられる。

・少人数が原因となる考えや意見の少なさを改善するには至らなかった。
・特別な場を常に設けられるわけではない。既存の学習机であっても，ペアやグループでの学習とは異なる雰囲気をつくり，話し合いを活性化できるようにする必要がある。